

藍い夏

今井福子 作



木村ひさえ 絵

『頼んでもいないのに、青空になんかしらないでよ』

あの日まで一番好きだった空の青。いまは嫌悪感すら覚える青空を睨みつけながら渋谷駅前の雑踏をすり抜けると、いきなり目の前にマイクが突き付けられた。

「中高生の意識調査なのですが、あなたの学年と、あなたを一言で表す言葉を教えてくださいませんか？」

哀れなほど不自然な笑いを浮かべたお姉さんと、ぼつちり目が合ってしまった。

「高三。わたしを表す言葉は、なんとなく……かな」

何人と同じ疑問符を投げかけ、いくつの言葉を拾ったら、このお姉さんの今日が終わるのだろうと思いつながら目をそらすと、ビルの電光掲示板に今を示す数字が並んでいた。

「8月12日・14時26分」ビルの上の真っ青な空と眩しい太

陽。付随する競技場の声援と拍手。

あの時の光に負けまいと目を見開き、人混みを縫うように足早に地下街に潜り込む。

「なんとなくのわたし」が生まれる前、わたしは走ることと記録への挑戦に燃える、負けず嫌いの女の子だった。

陸上短距離の選手だった父が、自分に果たせなかった夢を娘に託し、深い青空の元で思い切り走り出すようにと命名した、青藍せいらんと言う名前。期待通り父のDNAを受け継いだわたしは小学生の頃から様々な大会記録を更新し、怪我に悩まされながらも全国でトップクラスの成績を残してきた。

一位でゴールを決めた瞬間、耳に飛び込んでくる心地よい声援と拍手。電光掲示板に示された自分のタイムを見な